



Title	キェルケゴールに於ける「建徳」の概念
Author(s)	渡部, 光男
Citation	基督教学, 11, 25-27
Issue Date	1976-07-10
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/46325">http://hdl.handle.net/2115/46325</a>
Type	article
File Information	11_25-27.pdf



[Instructions for use](#)

キェルケゴールに於ける

## 「建徳」の概念

渡部光男

キェルケゴールの弁証法的な影と表の思想関係に於て、影の部分の中心的概念である「建徳」(Opbyggelse)を取り上げ、その位置と意味を正すことがこの発表の目的である。この分野は最近ようやく専門家の注目をあびて、六編の研究があるが、それらは質的にもばらばらであるが、優れたものとしてはA・パウレン女史の論文だけである。Kierkegaardiana, VI, 1966にのせた女史の論文は、建徳は内面的首尾一貫性をもった実存分析を形成し、信仰と云う実存の神関係をめぐり、人間の有限性への傾斜を批判する概念であつて、実存に対し信仰への決断をせまる助走の段階を示す概念であると理解している。しかし建徳の概念は宗教性Bへの往相面だけではなく、宗教性Bからの還相面からも捉えられるべきである。

建徳とは Op. byggelse (独 Er. bauung) であつて「上に建てる」である。しかしキェルケゴールに於ては三つの象面にて展開される概念となつてゐる。第一は倫理—宗教的段階に於ける建徳であり、第二は宗教性Bに於ける建徳であり、第三は宗教性Bから倫理的段階への還相面としての建徳である。『後書』(S. V. VII 551f.)の論述によれば、「建徳的なもの」はあらゆる宗教性に対する本質的述語であつて、はじめは(美的段階にては)自己の外にあり、倫理—宗教的には、実存の自己否定の過程のことであり、つまり自己の絶望の末に基底としてあるものに到達することであり、宗教性Bに於ては、自己の「建徳」を追求するために外部に求められる啓示との関係に入らうとする努力であつて「逆説的||建徳的なもの」と呼ばれる。更に還相としての(第二倫理学の)「建徳」は「キリスト教的な愛」として規定され得る。従つて建徳とは信仰への、信仰における、信仰からの自己否定による自己獲得の努力であり、信仰の逆説的弁証法の否定の項を形成するものである。信仰へ向い、「建てる」とは仮象としての実存の基礎(土台)をまず破壊することなのである、その末が「徳を深める」のである。

宗教性Aとしての「建徳」の概念(宗教的建徳)はキ

エルケゴールの十八篇の『建德的講話』の中で示されるものである。『講話』は権威なしに語られ、「建德的」講話であって、「建德」のための講話ではないと、キェルケゴールは語る。『講話』の対象は美的段階にあるものであり、『これか・あれか』などの表の著作によって示された実存の危機に対する倫理—宗教的な建德、つまり美的実存の自己否定を求める。つまり「建德」は第一に「怖ろしきもの」(det Forfærdende, S. V. X II 9f.)なのである。『講話』の示すものを一瞥すれば、永遠性の指示(1)、苦難としての賜物(2)、内面性の強化(5)、苦難と希望(6)、愛(4)、神の正義(6)、忍耐(10)、真理としての主体性(12)、救済(14)、とりもどし(15)、責め(16)、などが認められる。そこに共通に流れているのは、実存の宗教性Aに向っての否定と、信仰との弁証法的関係である。宗教性へ向っての自己の無化と信仰に於ける「受けとり直し」(大谷長博士による規定)である。

宗教性Bとしての建德は「救済の出来事」としての啓示と、実存の逆説的な関係の中での建德である。『キリスト教的講話』の中でも示されるように、実存は苦難のただ中に於て、絶望の瞬間に、逆説に触れ、信仰へと飛躍すること、これがキリスト教的建德である。ここで「建

德」は神の絶対的な愛であり、それと絶対的に関係する実存の肯定と云う、逆説的な「人間の愛」の展開である。還相面(第二倫理学)に於ける「建德」に関してキェルケゴールは『愛のわざ』の第二部で論じている。精神的に建てるものを支える生活の土台や根底をなすものは愛としての建德である。愛は全てのものの源泉である。つまり、建德するとは愛が愛を築き上げることに外ならない。「建德」が愛の本来的規定である。つまり実存の宗教的(信仰的)根拠として建德は信仰にもとづく愛なのである。

十九世紀思想史との関わりに於ては、キェルケゴールの「建德」の概念は、シュライエルマツハーの説く「敬虔な意識の覚醒と、礼拝に於ける伝達」としての建德の概念を、キェルケゴールは宗教性Bの「実存伝達」へと深化させていると云い得る。又民衆思想としての敬虔覚醒派(Den gudelig Vaekelse)の説く、「宗教的感情を高め、信仰の覚醒をうながすこと、広くは信仰を養い、実践的な指示を与えることとしての「建德」と云う理解をキェルケゴールは深化し、実存化したとも云い得る。

当時の用語法では、「信仰的」といった意味しか持たなかった「建德」を、キェルケゴールが宗教哲学的な概

念にまで練り上げた点も注目にする。ピエティスムの重視する「内面性」が、「建徳」として実存的信仰論の中心にまで高められたのである。